

人々の憎悪を餌に さらに激しい怒りや憎悪を吐く 橋本市長が、前代未聞の 小さい政治家に思えた!

メディア 仕分け人

北原みのり



「維新政治塾」の開講式であいさつする大阪市の橋下徹市長。(提供/PANA通信)

けた。囲み取材時の横柄な態度も含め、この人は、いったい何をするために政治家になったのだろう。

希望を語るのではなく、攻撃の言葉が、人の心に届くことがある。橋下市長を支えているのは、人々の憎悪だ。橋下市長は人々の憎悪を餌にさらに激しい怒りや憎悪を吐く。

リーダーとはどうあるべきだろう。政治家になる際に髪の毛を黒く染めた橋下市長は、形から入ったがる人なのだと思いが、彼の考える「リーダー」の形とは何だろう。橋下市長がテレビで恫喝するように語る姿を見る度に暗い気持ちになる。

そんな時に、辻元清美さんの「いま、「政治の質」を変える」(岩波書店)を読んだ。辻元さんは出版記念パーティーで、こう挨拶されていた。

「私は橋下市長と同じタイプの政治家でした。強い否定の言葉で自らの力をつけていくタイプ。今は、違う意見の人たちとも粘り強く交渉し、縁の下の力持ちになりたい」

ソーリソーリ! と政権に鋭く攻め入っていた辻元さんが、あつという間に国会から姿を消したのは生々しく記憶している。辻元さんが「橋下市長と同じ」だったのならば、私も「橋下市長を支持する人々」と同じだったのだ、と思った。未来の凶を描くのではなく、ただ目の前の敵を壊すことに夢中になるような気持ちで、私も辻元さんを応援していた。強いリーダーを欲していたのは、私自身でもある。

「いま、「政治の質」を変える」では、3・11直後の菅政権の内情や、

JALの再生に辻元さんがどう関与したかなど、「権力側」についた辻元さんがどう働いてきたかが書かれている。話が通じない、硬直した、魘魅魘魘の永田町で、諦めずに相手を説得していく辻元さんが、政治家としてとんでもなく進化したのを感じる。一度死んだ人間は、強い。

辻元さんの存在は、リーダーのイメージを変える。大きな声で仮想敵に向かい人々を團結させるようなリーダーではなく、縁の下の力持ちとして調整しながら地道に歩む。そういう理性と冷静をリーダーには求めたい。そういう素質を持つ人が、リーダーになったら、どんなに視界が暗れるだろう。

読後改めて、橋下知事の囲み取材やテレビコメントなどを見ると、「口パク」とか「タトウ」とか「起立」とか、言っていることのアマリの小ささに今さらながら驚いた。子どものような丸顔で、口を尖らせて、他人を恫喝する男が、急に笑えてきた。笑うには、あまりにも不気味な憎悪だけど、面白くないわけにはいかないほどの、前代未聞の小さい政治家に思えてくるのだ。辻元さんの言葉の後では。

きたはら みのり/文筆業。女性向けアダルトグッズショップ「ラブピースクラブ」代表。気になる、腹立つ、苛立つ、面白いことを本欄で仕分けしていきます。念願叶って、博多駅前テレビ街頭インタビューを受けた!!

大阪市の職員三万三〇〇〇人のうち一〇〇人強がタトウを入れていたことが話題になっている。橋下市長は「何をしてでも免職されない甘えがある」と公務員への怒りをぶちま